

沖ノ鳥島でサンゴ増殖計画 水産庁

2006年04月17日07時31分

日本最南端の沖ノ鳥島(東京都小笠原村)を水没から守ろうと、水産庁は来月から、サンゴを傷つけない世界初の新技術で同島周辺のサンゴの増殖に取り組む。同島の陸地部分はサンゴ礁でできているが、近年、環境の変化などで周辺のサンゴが減りつつある。陸地がなくなれば沿岸約40万平方キロにおよぶ排他的経済水域(EEZ)も失いかねないため、同庁はまず、領土保全面からも重要な同島でサンゴ礁復活を目指す。



上空から見た沖ノ鳥島。中央の円形が護岸で囲まれた陸地＝昨年12月、水産庁提供



沖ノ鳥島で生息するサンゴ＝昨年12月、水産庁提供



沖ノ鳥島で死滅したサンゴ＝昨年12月、水産庁提供

同庁などによると、沖ノ鳥島では、98年に世界中でサンゴ礁に大きな被害を出したエルニーニョ現象による水温上昇や魚類の食害で、サンゴが危機にさらされている。

サンゴ礁からなる島の主な自然の陸地部分は2カ所で、面積は合わせて10平方メートルにも満たない。このため中国は04年から「島ではなく岩だ」と主張し、日本のEEZを認めない姿勢をとる。

国は87年以降、陸地部分をコンクリート製護岸や消波ブロックで囲んだ。しかし国連海洋法条約では、EEZ設定の根拠となる島の定義を「自然に形成された陸地」としてコンクリートの人工島は認めておらず、島とEEZの確保のためにサンゴ礁の保全を求める意見が以前から出ていた。

現在のサンゴの養殖技術は、サンゴの一部を切り取って移植するためサンゴ礁を傷めてしまい、自然回復の目的には不向き。そこで同庁は開発されたばかりの新しい技術に着目。サンゴが海面近くに産卵した卵を採取し、水槽やいけすで育てて自然に戻す方法だ。

開発したのはサンゴの研究をしている財団法人「熱帯海洋生態研究振興財団」(東京都品川区)の大森信・東京海洋大名誉教授ら。18年にわたる研究のすえ、沖ノ鳥島周辺のものと同じ種類などのサンゴを食害に負けない大きさにまで育てることに昨年、成功した。

同庁は5月から沖ノ鳥島周辺で卵を20万～30万個採取して水槽で育て、早ければ来夏にも島周辺の海底への移植を試みる。



〈キーワード: 沖ノ鳥島〉東京の南南西1740キロの海上にある孤島。東西4.5キロ、南北1.7キロの長円形のサンゴ礁の内側に東小島、北小島と呼ばれる陸地がある。島を基点に半径200カイリ(約370キロ)のEEZは日本の国土面積(約38万平方キロ)を上回り、マグロ、カツオなどの豊富な漁場でもある。